

第63回 香川生物学会総会 研究発表要旨

ハントウアカネズミ *Apodemus peninsulae*, タツアカネズミ *A. draco*, オオミミモリアカネズミ *A. latronum* の地理的 (水平・垂直) 分布

金子 之史

(香川大名譽教授：香川県坂出市在住)

ロシア, モンゴル, 朝鮮, 中国, 台湾, ミャンマー, インド, サハリンおよび北海道産180地点1355頭の博物館標本を用いて, 頭骨測定値により *Apodemus draco* (*Ad*), *A. peninsulae* (*Ap*) と *A. latronum* (*Al*) の3種を同定し, 水平 (小・大縮尺) と垂直分布図を作成した。Kaneko (2010) の同定法を概略して述べた。*Ap* はロシア, モンゴル, 朝鮮, 中国では大興安嶺沿いに四川省横断山脈に入る分布で, 北緯30°以南では3地点の高山帯の分布しか見られず, 北方系哺乳類の北方型分布 (中国科学院中国自然地理編集委員会, 1979の9分布類型による, 以下同様) を示した。*Ad* は北京周辺と秦嶺山脈以南ではミャンマー北・中部, インド北東部にまで分布し, 南方系哺乳類の横断山脈型+南中国型分布を示した。*Al* は北では北緯32°まで南では北緯26°の金沙江まで, 東では東経104°沿いの岷江まで西は東経96°までの分布し, 南方系哺乳類の横断山脈型分布を示した。*Ad* の河北省の不連続分布は他の哺乳類にもみられ, 中期更新世の温暖化と関係があろう。採集標高相対頻度分布図 (500m間隔) では *Ap* は500mのピーク以降3500mまで徐々に減少, *Ad* は2000~3000mピークの1凸型 (500~4500m), *Al* は1500m以降徐々に増加し5000mでピークであった。*Ad* と *Ap* は緯度に対して逆相関を示したが, これらの種が主に広葉樹林・落葉樹林・針葉樹林に生息することと関係するだろう。*Ad* の河北省以外の寧夏・青海・西藏・広西省の既報告は北・西・南限に重要であるが種同定に問題があり, *Ap* の雲南省・西藏東部の既報告も今後の検討課題である。

高松市における市街地の拡大とタンポポの分布

末広喜代一・原田 恭兵・縄田 将史・北川 優子・野崎 礼実 (香川大・教育) 福家 英樹 (香川県立高松高校)

「タンポポ調査・西日本2010」実行委員会の呼びかけに応じて, 2009年と2010年に香川県全体を対象にタンポポの分布調査を行ったが, 高松市の市街地部で過去に2回詳しい分布調査を行っていることから, 高松市の市街地部を中心とする範囲で詳しい分布調査を行い, 過去の調査結果と比較した。

外来タンポポは過去の結果に比べて大幅に分布範囲を広げていた。市街地中心部のほとんどは外来タンポポ, 特にアカミタンポポに占められ, 調査範囲の南端まで分布していた。セイヨウタンポポは市街地の中心部よりむしろ郊外の住宅地周辺に多く見られた。在来のカンサイタンポポは市街地中心部にはほとんど分布せず, 南の内陸部に行くに従って分布地点が増えていった。屋島や紫雲山の山裾は市街地に隣接しているにもかかわらず, 在来のカンサイタンポポやシロバナタンポポが多く分布していた。これらの在来タンポポと外来タンポポの分布範囲の違いは, 大雑把に見ると, 「市街化区域」と「市街化調整区域」の線引きに一致していた。

分布調査を行った時期の地形図から求めた市街地的環境の割合と外来タンポポの割合には有意な正の相関があり, 1981年と1990年にはほぼ同じ回帰直線で表されたが, 2009・2010年では, 外来タンポポの割合が全体に高くなっていた。その結果より, 1981年や1990年の時点では市街地的環境の拡大に対して外来タンポポの分布が追いついていなかったが, 今回の調査結果では, 追いついてきたと考えられた。

タンガニイカ湖南端におけるシクリッド魚類の地理的色彩変異

松本 一範 (香川大学教育学部)

タンガニイカ湖の南端の湖岸線85kmに沿う20地点において、普通種である48種のシクリッド魚類について地理的色彩変異を調査した。16種に2タイプ以上の色彩形態が見られ、11種が調査域で限定分布を示した。それらは全て岩礁性魚類であった。2つの長い砂浜(7kmと13km)が、色彩形態及び限定分布を示す魚種の分布の境界となっていたため、その砂浜が障壁となり、浅場の岩礁域に生息するシクリッド魚類の分散が妨げられている可能性があるかと推察した。

タンチョウの保護活動に参加して

山本 正幸 (香川県高松市)

日本野鳥の会は希少な野鳥を保全するために会員や協力者の寄付金をもとに鳥獣保護区などの法的保護がされていない土地を購入して保護区を設けている。この活動は1987年に始めて2011年5月現在には全国で33か所2938.9haの保護区を設置している。そのうち北海道ではタンチョウ *Grus japonensis* やシマフクロウ *Ketupa blakistoni* の保全のために湿原や森林21か所、2584.8haの保護区を設けている。

筆者は日本野鳥の会の招きで2010年6月と2011年2月に北海道の保護区の一部を巡り保護活動の現状を視察した。6月に訪れた「渡邊野鳥保護区フレシマ」(根室市)は五本松川とホロニタイ川の下流域に広がる湿原、草原、湖沼で形成される203.7haの保護区であり、ここでタンチョウ1つがいが抱卵していた。そこは正に湿原の原風景そのものでタンチョウ保全には広大な湿原が必要であると実

感した。また、「渡邊野鳥保護区ソウサベツ」(根室市)ではシマフクロウ保全のためにケヤマハンノキ *Alnus hirsuta* やミズナラ *Quercus mongolica* などの植樹体験をした。シマフクロウが営巣するには樹洞が必要である。大木が減少した今日、樹洞ができる直径100cm以上の大木に成長するためには数百年の時間がかかる活動である。

2月にはタンチョウ保全の拠点の一つである「鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ」(鶴居村)で給餌活動を体験した。ここでは冬季に約300個体のタンチョウが群れで訪れる。餌となるデントコーンを食べやすいようにほぐす体験もした。デントコーンは購入もするが農家からの持ち込みも多いという。ほかに、鶴居村では農家による給餌活動の場所が27か所あるという。現在は村挙げての保全活動であるが、地域の理解を得るまでには苦労もあり時間がかかったと聞く。また、近くの雪理川(鶴居村)に早朝訪れてタンチョウの集団ねぐらを観察した。気温-15℃でも凍らない流れの中は獣類などの外敵を避ける安全な環境であり、約150個体が群れていた。ここでは人的圧迫を避けるための歩道橋も架けていた。

タンチョウは特別天然記念物に指定されRDBでは絶滅危惧IAにランクされているが、現在は留鳥個体群が北海道東部を中心に約1000個体が生息しているものと推定されている。また、シマフクロウもRDBで絶滅危惧IAにランクされ現在は北海道東部を中心に約140個体・50つがいと推定されるが、種保存の限界数といわれる。これらの保全には恒久的な生息地の確保のみならず様々な知恵と時間のかかる努力が必要であることを実感した。